

## ～旧約聖書を読んで感じること～ (81) フェニキアの王女 イゼベル

北イスラエル王国第6代目の王となったオムリは、父の名も記されていませんし、どこの部族出身かも分かりません。イスラエル軍の司令官でした。先王が謀反で殺され、反逆者を7日目に倒しました。オムリと対立するもう一方の将軍と争って勝ち、王となりました。日本で言えば秀吉のような役回りです。堅固な都をサマリアに定め、在位12年間で確固とした王朝を築き、息子アハブに継承させています。息子アハブは、フェニキアのシドン人の王、エトバルの娘イゼベルを妻に迎えました。



イゼベル John Byam Liston Shaw 1896

イゼベルは、フェニキアとイスラエルの双方が権力拡大を狙い、政略結婚によって、海辺を遠く離れた山の上の新しい都、サマリアに送られてきたのです。父はフェニキアのシドンの港を本拠地として、一帯に活動を広げる初代の王ですから、父の権勢をそのまま負って、やって来たのでしょう。あらゆるフェニキアの政治手法、文化、生活習慣をイスラエルに持ち込みました。

古代のフェニキアは地中海の各地に都市国家を作り、海上交易で栄え、ガラスや紫染料を生産し、高度な技術による手工業でも栄えていました。また、アルファベットを生み出し、ギリシャ語や地中海沿岸のラテン系の文字の祖となっています。ソロモンの時代には都市の一つ、ティルス<sup>1</sup>の王ヒラムから、資材、作業員の協力を得ていました。

彼らの信仰はバアルの信仰です。彼女はバアルの祭司、預言者450人、アシェラの預言者400人を結婚に際し、共にサマリアに連れて来ましたから、様子も一変したでしょう。

アハブは成り上がり者の王でしたから、王としての経験、権威や見識もなかったのでしょう。妻である姫君イゼベルの言いなりになりました。彼はネバトの子ヤロブアムの罪を繰り返すだけでは満足せず、シドン人の王エトバルの娘イゼベルを妻に迎え、進んでバアルに仕え、これにひれ伏した。(列上16:31)

まず、イゼベルはアハブに仕えていた預言者を切り殺しました。そのうち百人を救い出したアハブの宮廷長オバデヤも、イゼベルの暴挙にはなすすべもありませんでした。エリヤの預言したように、飢饉、干ばつが激しくなり、預言者エリヤを捜しに出かけます。エリヤもアハブ王と対決するために戻ってきたところでした。イゼベルの暴虐を訴え、アハブ王のもとに来るように頼みました。

エリヤはバアルの預言者450人、アシェラの預言者400人に対し、たった一人でカルメル山で対決しました。イスラエルの民はアハブ、イゼベルを恐れてエリヤの「主に従え」という言葉には無言でした。バアルの預言者の祈りにバアルは答えず、エリヤの祈りに神は答え、祭壇に主の火が降って、焼き尽くす捧げ物と薪、石、塵を焼き、溝にあった水をもなめ尽くした時、イスラエルの民は「主こそ神です」とひれ伏したのです。エリヤはバアルの預言者を一人残らず捕えるよう命じ、彼らをキション川で殺しました。そうするうちに空は雲に覆われ激しい雨が降り始め、干ばつは終わりを告げました。

アハブ王としては干ばつの終わりは幸いでしたが、妻イゼベルには、手の内すべてを握られていたようです。イゼベルにエリヤのしたことを告げると、イゼベルはエリヤに使者を送ってこう言わせた。「わたしが明日のこの時刻までに、あなたの命をあの預言者たちの一人の命のようにしていなければ、神々が幾重にもわたしを罰してくださるよ。」と、エリヤを殺すと伝えました。イゼベルが聖書の中で最大の悪女と言われているのがこのバアルへの信仰のため、イスラエルの神を伝える預言者を抹殺しようとする点です。エリヤはそれを聞いて恐れ、再び、直ちに逃げました。